〈追悼〉

稀代の歴史家、堀越孝一先生に贈る哀悼の辞

福井憲彦

二〇一八年九月八日、堀越孝一先生が、享年八四歳でご逝去された。

訃報に接した我々は皆、先生が学習院を定年退職後も着実に著書や編著を出しておられただけに、突然の報に驚くと同時に、それぞれに、先生との関わりについて思いを巡らしたのではないだろうか。

堀越先生は、ご自身の若い頃から相手が大先生であろうと、その議論が納得できなければ、礼を欠くことなく敢えて異を唱えることも辞さない、いうまでもなく西洋中世史の大家でいらした（私が想起しているのは、堀越先生ご自身が公にしておられた渡辺一夫先生とのやりとりである）。

学習院大学文学部史学科においては、定年まで三〇年に亘って熱心に学生・院生の指導にあたってくださり、定年後は、教え子の一人である森ありさ日本大学教授のはからいで、日大文理学部の大学院で歴史研究を志す院生の指導にもあたられた。いずれにおいても、歴史を講じるのみでなく、それぞれの世代の生き方にまで関わる多様なご配慮をなさる、芯からの教育者でもいらした。堀越先生の学生や後輩に向けられる温かい眼差しは、遠い過去の歴史を生きた人々に先生が向ける眼差しを想起させる、そういうものであったように私には思われる。

私が先生のお名前に初めて接したのは、私自身がまだ学部学生であった頃ではなかったか、と記憶する。半世紀も昔のこと、かつて中央公論社から刊行されていた「世界の名著」というシリーズから、ホイジンガ『中世の秋』の翻訳が刊行されたのが一九六七年。その翻訳者として、堀越孝一という名前が私の頭に刷り込まれた。まさかいずれ、私自身がその先生の同僚になるなどとは、思う由もなかった。当時私は、この翻訳書の解説執筆者である堀米庸三先生の授業を履修していたので、もしかしたら堀米先生から読みなさいと勧められ、中世史を専攻する勇気など持ち合わせてもいなかった私でも、その言葉に影響されたのかもしれない。この辺りの記憶は曖昧である。曖昧でないのは、この訳者、すなわち堀越先生の訳文の、他の翻訳書とは異なる文の味わいに驚嘆した記憶である。当時、学生仲間の誰もが、訳者が老大家ではないかと想像したに違いない。

しかしこの頃、堀越先生はまだ三〇代の半ばであった。西洋中世史を専攻している研究者がポリグロット、すなわち多数の言語に習熟していなければ、その研究が成り立たないのは当然なのであるが、当時はオランダ語に習熟して大著を訳出できる日本の研究者がいること自体が、私には驚きであったことも、お名前が強く印象に残った一因であったかもしれない。

しかも堀越先生は、ホイジンガという中世史の泰斗の大著を前にしても、絶えず批判的な眼差しを忘れていない。それは、温かい批判的眼差しである。この『中世の秋』の訳書は、二一世紀の門口に入ったところで「中公クラシックス」という新書版二冊で復刻された。堀越先生は、恩師堀米庸三先生に対して、深い敬意を払っておいでであったが、しかし学問的には非妥協的な姿勢を変えることがなかった。この新書版では、旧版に付されていた堀米先生の解説は、堀越先生のお考えとはずれるところがあるということで、削除されている。ここでも、厳しい学問的姿勢が示されている。

そして、新たに付された堀越先生の「『中世の秋』を書くホイジンガ」という短い緒言が、この本を書いた原著者ホイジンガについて、先生があくまで非妥協的にその姿を追い求め、歴史的に考察しておられて素晴らしい。原著第一版のホイジンガによる緒言には「若さの気負いの気配がある」というのだ。翻訳をしたことのある者なら分かることだが、解説にもこうはなかなか書けない。次いで、ホイジンガが『中世の秋』出版の翌年に書いた論文を引用する。こうした考察材料の検索を、堀越先生は一九六七年の翻訳刊行以後も怠っていなかった、ということである。ここでは、これ以上、この点にこだわった引用はしないでおこう。まだお読みでない方は、「中公クラシックス」版の緒言二三ページあたりの堀越先生による文章を、じっくりとお読みください。先輩の大家であるブルクハルトのルネサンス理解を批判的に意識しているホイジンガを、堀越先生はまた、彼らの時代的コンテクストのなかで、そしてまたネーデルラントという地域的文脈のなかで読み解いておられる。史学史的考察の好例である。

こうした堀越先生による中世の秋の時代に関する考察は、先生のライフワークの一つであった『ヴィヨン遺言詩』に関する考察へと接続してゆく。ホイジンガの『中世の秋』が「若者の文学」であることは、「ヴィヨン遺言詩」が青春の回想であることと相同だというのである。

この『ヴィヨン遺言詩』について、堀越先生はフランスでの校訂版史料に無批判に依拠することなく、パリの国立図書館所蔵写本に直にあたって追究され、大本に立ち返って読み解くという本格的な、実はヨーロッパの研究者も現在ではそこまではしていないというレヴェルでの研究を進められた。まったく専門外の私にはコメント能力はないが、『ヴィヨン遺言詩注釈』四巻は、余人をもっては追究し難いものであることは多言を要しない。そして、全体としての訳註本を一冊にして出されたのが、誠にライフワークというに相応しい一巻、二〇一六年刊の『ヴィヨン遺言詩集』である。この一生をかけてといってよいほどのお仕事の持つ迫力は、専門外の私の元にまで届いてくる。一言でいえば、「すごい」という以外ない。

そして堀越先生のもう一つのライフワーク、といってよいであろ

う歴史家としてのお仕事は、ふつうは『パリ一市民の日記』と訳されてきた、大変貴重な中世末の史料に関する探索と考察、そしてご自身による翻訳である。バチカンの図書館にまで足を運ばれて探究なさったこの史料の読みは、はじめ『日記のなかのパリ』と題してサントリー博物館文庫の一冊として刊行され、のちに改訂補筆され、『パンとぶどう酒の中世　十五世紀パリの生活』と題してちくま学芸文庫から刊行された。

名前も明確に残らない過去の市民の暮らしぶりや心のありようは、なかなか直接的な史料がないために、つかむことがたいへん難しい。この史料は、中世の秋といわれる時期に関して、実に貴重な証言を現在の歴史家に残してくれているのであるが、さて、その読み方となると、これが簡単ではない。下手をすれば、時代錯誤的な、現代の基準を無意識に反映させたような読みとなってしまう危険がある。堀越先生は、そう警告を発し、かつての時代に立ち戻って、これを記した市民の目線に立ち、その「筆者が生きていたがままに、「中世の秋」にふたたび生きたい。それが日記を読むということで、これは、正直むつかしい」と語りつつ、読み解く試みを終生とぎれなく続けられた。

その成果は、『パリの住人の日記』として三巻目までが出され、残念ながら完結することを得なかった。全体の四分の一ほどが未完で残されることになった。その三巻目に「あとがきに代えて」を執筆なさったのが、堀越先生が最初に勤められた茨城大学時代の教え子、流通経済大学の関哲行教授である。そこに関さんが引用してくださった『ユリイカ』掲載の堀越先生の一文は、それを読んでいなかった私には、とてもありがたいものであった。そのタイトルは「相手の身になって訳すこと―それが裏目に出ることもある」である。特にこれから歴史の研究を志す人には、分野を問わず、是非とも味読してもらいたい一文である。

それにしても堀越先生、良いお弟子さんたちを育ててこられました。それ自体が、先生の残された数々の著書、訳書とならんで貴重な遺産というべきものと思います。

ご逝去一年後の秋に、感謝の念を込めて。